

令和6年度第1回尾張旭市健康推進委員会 議事録〔要旨〕

【開催日時】

令和6年10月18日（金）

開会 午後1時30分

閉会 午後2時30分

【開催場所】

尾張旭市保健福祉センター4階 シアタールーム

【出席委員：11名】

安井 徹郎 （瀬戸旭医師会）
古峪 秀樹 （尾張旭市歯科医師会）
裕原 吉久 （尾張旭市薬剤師会）
小川 浩平 （旭労災病院）
若杉 里実 （愛知医科大学）
大橋きよ子 （尾張旭市地域婦人団体連絡協議会）
久野 博行 （尾張旭市スポーツ協会）
大池 幸子 （尾張旭市食育ラボ）
吉田 民子 （尾張旭市健康づくり推進委員会）
古橋 完美 （瀬戸保健所）
丸山 雄二 （公募委員）

【欠席委員：2名】

松浦 哲生 （公立陶生病院）
下村 波基 （尾張旭市自治連合協議会）

【傍聴者】

なし

【出席した事務局職員等】

西尾健康課長、川原課長補佐、磯村課長補佐、宮下副主幹

【議題】

- (1) 「第3次健康あさひ21計画」策定に係る作業部会の実施結果について
- (2) 「第3次健康あさひ21計画」の骨子案について

【会議の概要】

- 1 開会
- 2 議題
- 3 その他
- 4 閉会

1 開会

＜一部変更委員紹介、欠席委員、会議公開についての報告、資料確認＞

2 議題

- (1) 「第3次健康あさひ21計画」策定に係る作業部会の実施結果について
＜事務局より資料に基づき説明＞

(A委員)

作業部会は事前にヒアリングシートで集めた情報でということであるが、ヒアリングの対象は誰から、また、どこから集めた内容であるか。前回と同じメンバーであるのか。

(事務局)

作業部会に参加しているメンバーについては、業務に携わっている専門職員である。他にも、関係団体の食育ラボ、健康づくり推進員、スポーツ協会に事前にヒアリングシートを同様の形で配布させていただいている。

(A委員)

部会としては三者から聴いたということか。

(事務局)

そうである。

- (2) 「第3次健康あさひ21計画」の骨子案について

＜事務局より資料に基づき説明＞

(B委員)

25 ページの分野別の取組の中の①～⑦まではわかるが、「⑧健やか親子」が入っている。これは今回の第3次計画と別に、健やか親子21の第3次とミックスしていくということなのか。

(事務局)

健やか親子21については、健康分野の中の健やか親子という位置づけで施策を考えている。全体を取り込んで計画の構成をしていくという考えではない。個別の分野で今回の健康あさひ21の中で施策を進めていきたいと考えている。

(B委員)

分け方の大きさが違う気がした。

(事務局)

全体であると、あまりにも大きすぎてしまうので、あくまで健康に関する部門についてという限定的な考え方をしていただければと思う。

(A委員)

第3章の方向性は、作業部会で検討した重点目標に対して各主体で取り組むということか。

(事務局)

今後、検討して計画の中に盛り込んでいくことを考えている。

(A委員)

資料1 作業部会検討結果の3ページ「②身体活動・運動」では、「各主体で取り組むこと」に「トレーニングジムとの連携や、企業は行政とコラボし」とあるが、この地域でジム等がどれくらいあるのか、今までどういった連携をしてきたのか、企業とのコラボ実績や見込みなどはあるのか。一方的に決めても、なかなかできないと思うが、対象がどうなっているのかある程度は把握し、連絡等はとれているのか。

また重点目標「③効果がわかる仕組みづくりをします」には、「草取りついでにごみひろい」ということが書かれている。測定関係はしていないと思うが、定期的に測定を行い、健康を維持できているのかどうかということをフィードバックしないと、実際の効果が上がらないのではないのか。計画・実施をして評価をする、評価するには前提がないと評価ができない。そのあたりは考えているのか。

先ほどの質問にも関係するが、作業部会のメンバーでメンタル関係の方もいるかと思うが、そういう方は入っていたのか。

3ページ「共通」に「うん活をします」とあるが何のことだろうと思った。通りの悪いネーミングはやめたほうが良い。イメージしやすいようなネーミングが良いのではないのか。再検討していただきたい。

資料2 骨子案 18 ページのレーダーチャートで「歯の健康」が良い状態であった。そこで行った施策の取り組み方が良かったので良い結果になっているのでは。PDCAを回すということからすると同じようなことを、ここに倣って行うということも一つの考え方である。

(事務局)

ご指摘いただいた、身近なことで体を動かすというところで、「トレーニングジムとの連携や企業は行政とコラボし」とあるが、現在は、商工会の商工だよりも市の事業について掲載して企業に知らせていくことをしている。また、民間のトレーニングジムとの連携は難しいが、体育館と連携しようとしているところである。

ごみひろいのついでにウォーキングというものがあるが、健康課の思いとしては、運動する機会がない方も歩数を意識していただきたい。ただ歩いてくださいというだけでは、なかなか行動が変わらないので、地域活動を参加する時に、そういったところも意識してもらえるような周知ができればという考えもある。

「うん活」については、身体活動・運動グループの中で、運動してくださいというだけでは伝わりにくいので、今は脳活など「〇〇活」という言葉が流行っているところから「うん活」という言葉が意見として挙がった。確かに、おっしゃっていただいたように運動の「うん」と読み取っていただけないとわからないと思うので、表記については検討させていただきたい。

(事務局)

補足させていただくと、グループワークで出た内容は、ほぼそのまま入れている状況。実際に、計画に落とし込んでいく上では、わかりにくい言葉についてはまとめさせていただく。また、地域活動をするためには、業者も関わっていかないといけないし、体育館やジムとのコラボといっても行政が間に入り込むようなところもある。健康という部分だけではないが、「あたまの元気まる」というものがある。「あたまの元気まる」とは、認知症の前段階である軽度認知障害のリスクを評価するチェックテストであるが、先日、スギヤマ薬局やイトーヨーカドーの場所を借りて体験会を催すなど行政が間に入って実施している。

評価については、問い方はいろいろとあるが、一番はアンケートが取り組みやすいのではないのかと思うので、指標を取り込むことはできるのではないかとご意見を聞いて感じた。

(C委員)

基本方針の「(3) コミュニティを中心とした健康づくり活動の推進」があるが、コロナ禍を経て人の健康に大きく影響を与えるものとして、コミュニティや人との関わりなどが注目されている。それが計画の中にも盛り込まれていると思うが、指標の中にコミュニティが活発になったことが客観的にわかるようなものは入っているのか。例えば、ボランティア活動をする方が増えた、社会活動に参加する方が増えたなどといった指標である。もし、基本方針の中にコミュニティのことを方針として入れるのであれば、そういったところの評価項目も足されると良いのではないと思う。

(事務局)

現行計画にも設定があるが、地域活動をしている人の割合の指標を入れているので、こちらで評価していければと考えている。

(B委員)

資料2 骨子案9ページに「尾張旭市女性の平均自立期間が長くなっており、男性もほぼ横ばい」という結果になっているが、何か背景として分析されていることはあるのか。グラフとしては載っているが、これを結果として見て事務局としてどう捉えているのか。

(事務局)

このデータは国保のKDBシステムから出ているものになる。その項目でも特定健診での問診の項目も出ているが、愛知県と比較すると運動習慣がある人の割合が、尾張旭市は割と高く出てきている。健診を受けた方のほうが、健康意識が高く、たまたまそうになっていたのかもしれないが、健康都市の20年の取組の中でも、ウォーキングコースをきれいに整備し、らくらく筋トレ体操を進めてきたので、身近で運動できる機会があることや歩きやすい環境が整ってきたと感じている。介護保険の認定率も低く出ていたところもあるので、これまでの健康都市の取組がここに活かされているのではないかと考えている。

(B委員)

今の事務局の説明でよく伝わったが、計画だけを読んでいるともったいない。一生懸命、健康都市として行っていることがどこかに出てきて、そして第3次に向かっていくことがもう少し出てくると、より良い計画になっていくのではないかと感じた。

(委員長)

もう少しアピールしたほうが良いということであるか。

(B委員)

そうである。結果だけを読んでいると、そうだったのかということだけに終わってしまうので。書き方であると思う。せっかく良いことをされているのにもったいない。ここから12年間続く計画なので、市民が運動しようと思えるようにしてほしい。

(事務局)

健康都市が作っている健康都市プログラムでは、外に出かけたくなるまちということで全体的に捉えていて、まちの公共交通機関も含まれているので、そういったことも具体的に、平均寿命と健康寿命との差が少なくなるような対策として盛り込んでいければと考えている。

(B委員)

概要版でも良いので作っていただけると、より住みたくなる尾張旭市になるかと思う。

(A委員)

中間見直しでは、身体活動については検討事項がたくさんあった。

中間見直し版34ページの重点目標2で「運動を継続してできる環境や仕組みづくりを整える。アプリや情報サイトの作成により、ウォーキングや筋トレ等に継続して取り組むための仕組みづくりを行う。既存の保健事業によって、スポーツ施設との連携や定期的な運動継続のチェックが

できるしくみを導入し、市民が継続して運動に関わりやすい環境づくりを検討する」とあるので検討の継続をされているかと思う。また、重点目標 3 では「運動・スポーツ関連の企業や民間のスポーツクラブ等と連携した取り組みを検討する」。その他、「市民自身の体験談の発信等、参加型の情報発信の機会づくりを検討する」ということが載っている。「健康ポイント」のような取り組みは、近隣でも非常に進んでいる例があり、テレビで紹介されてもいるが、具体的に検討されているのか。

(事務局)

健康ポイントについては、健康都市推進室が行っているポイントもあるが、健康課ではアプリや活動量計を用いて、歩数や体組成を測るとポイントがつくという事業を令和 5 年度から始めている。健康ポイントプログラム事業は、今まで教室等では高齢世代の 60 歳代後半から 70 歳代の参加が多かったが、40 歳代や 50 歳代の参加もある。メタボリックシンドロームが男性の方が多いという結果が出ていたが、狙いたい層の方々に参加をしていただき始めていると思うので、これからも強く周知していきたいと考えている。

(A 委員)

実績についてはどうか。

(事務局)

令和 5 年度から行っており、定員が 300 人であったが 300 人は集まらなかった。ただ、その事業の最初と最後にアンケートをとったのだが、終了後のアンケートでは日頃の歩数が増えたことと、定期的に血圧や体組成を測る習慣がついたということであった。ポイントが付くということもあるが、これをすることによって日頃、自分自身が本当に歩いていないことに気づくことができたというご意見を多数いただいた。この事業は来年度も行っていく予定。参加した方は、行って良かったという満足度の高い事業であったので、周知にもっと力を入れていきたいと考えている。

(A 委員)

そのように効果があるのであれば、例えば 3,000 人を目指して頑張っていただきたい。

(事務局)

ポイントを貯めると 4,000 円分のクオカードや電子マネーに交換することができるので、母数が増えると予算も増えてしまう。また、途中でやめないようにスタッフがポイントの付与を定期的に見て、あまりにもポイントが増えていない方には、電話でお声かけをして継続できるような促しをしている。そのため人数が増えてしまうとフォローが難しくなってしまうので、定員を 300 人としている。

3 その他

<次回会議日程、会議報酬について>

4 閉 会

以上